往生異聞

金石範

金石範

往生異聞

往生異聞

一九七九年一一月一〇日第一刷発行

著者＝金石範

発行者＝堀内末男

発行所＝株式会社集英社

東京都千代田区一ッ橋二～五～一〇　郵便番号一〇一

電話〇三―二三〇―六三六一〔出版部〕二三八―二七八一〔販売部〕

印刷所＝大文堂印刷株式会社＋株式会社美松堂印刷所

定価＝九八〇円

著者との諒解により検印は廃止します。乱丁・落丁の本はお取り替えします。

©1979 Sekihan Kin

Printed in Japan　0093――772228――3041

目次

至尊の息子　5
往生異聞　95

装丁　田村義也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

往生異聞

至尊の息子

一

椅子に坐ってチャヂャン麺を待っている張山道（チャンサンドウ）の腹が、ぐるぐるっとみぞおちにまで軽い震動を起こしながら鳴った。おやっと思った瞬間、こんどは続けて屁が放たれる。固い椅子が尻を支えていたので、屁はかなり詰まった勢いのある音を立てた。彼はちょっと尻を浮かして坐り直しながら足を組み替えた。屁のにおいがかすかにのぼって来る。むっと油っこいにおいが流れてくる奥の調理場で、店の主人が息子と何かぐずぐずいい合いをしていた。店先には張山道の他、客はいない。

張山道は除隊後半年になるが、まだ適当な仕事にありつくことができないでいた。この国では除隊証明がないと、就職も、商業も農業も一切の就業ができない。つまりは社会生活が営めないようになっているのだが、張山道は軍隊での二年余りの服務を終えたのにこれといった仕事がな

いのである。

小さな中華料理店の片隅で表紙の破れた大衆雑誌のページを繰りながら、張山道の頭はいろいろの雑念でごちゃごちゃと廻転していた。

何よりも、この夏休みにソウルから帰省した高校の同窓生たちの希望にみちた姿が、失業中の張山道には刺戟が強すぎた。……うむ、彼らは大学に在学中というだけで、あの地獄みたいな韓国軍隊で「キハブ（気合）」の拷問を受けずにすんだのだ。後ろに〝バック〟を持った連中が、おれはどこそこの新聞社だとか、銀行だとか、官公署だとか、まだ在学中からもう一、二年後の就職が決まったようないい方をするのが頭に来る。やっぱり大学を出なければダメなんだ。それに〝バック〟がなければ……。かつての同窓生もいまはおれを置き去りにしたエリートさまだ。この社会を支配するのは〝ワイロ〟と〝バック〟……、〝バック〟があれば、なんのかので一生兵隊にだって行かずにすむ。〝バック〟とカネがないと、陸軍訓練所から本隊配置になっても、危険な三十八度線あたりの守備隊送りになるのが関の山だ。うむ、ひとつ何か、ばあーん！　とやりたいなあ、親のすねをかじりながらえらそうにぬかして、それで未来のホワイトカラーさまたちになる彼らを、せめて一回、二回でも、あッ！　といわせてやりたいよ、まったく。

頭の禿げた店の主人がチャヂャン麺を持ってきた。箸で麺を十分に掻き廻し味噌味の薬味をたっぷり行きわたらせてから、口に入れる。きゅうりの細く刻んだのを噛むと、しゃきしゃきと音がして気持がいい。調理場に戻った主人が、また息子といい合いをはじめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それにしても、兄貴はどうだ。じめじめしてなんとも要領が悪く、すかっとしないよなあ……、彼は面白くなさそうに雑誌を閉じる。それに、あの縁故地出張とやらの与党の選挙運動のために帰省してきて、二晩続けて酒ばっかり食らってるありさまだ……。縁故地出張、流行語だよ。出張費名目のカネは不正選挙資金というものさ、おれだって聞いていて知ってるとも。それを兄貴のやつは、大義名分よろしく支社の現状把握出張だといいやがる。平社員なもんだから、たった五万ウォンもらって来たんだ。そんなカネ、酒でも飲んでしまわないと気がすまんとでもいわんばかりに使う。いや、じっさいそうなんだろう。気が弱いようだけれど、あれで頑固者なんだから。おかげでおれも兄貴から五千ウォンの小遣いを頂戴できたというもんだ……。

張山道の頭に、兄を怒鳴りつけた父の顔が浮かんだ。いま店先に客を置いたまま、ぐじゅぐじゅいい争っているここの親子とは、ちょっと違う。おれたちの親父はエリートを自認していて、面子ばかり表に出したがるからいっそう始末におえない。うむ、それにしても、兄貴が来てから親父はすっかり機嫌を悪くしてしまった。親父のすすめる縁談を聞かないで、ソウルで茶房（喫茶店）のウエイトレスと仲よくなって同棲をはじめた兄貴にも問題はあるだろうが、家門を汚すとばかり、まるで息子を非道な犬畜生扱いするのはひどすぎはしないか。そうだ、兄貴はそれでもちゃんと結婚式を挙げるつもりでいるんだから……。いや、ほんとうのところは、それがいっそう親父を怒らせたらしい。それで怒るなら、親父のほうが非道というもんだろ。しかも、そんな女とは手を切れとばかり、道会議員をしている友人の娘とこんどの出張中に見合いをさせよう

としているのに、言を左右にしてうんといわないものだから、すっかり頭に血がのぼってしまったのだ。まるで達磨みたいにものをいおうとしない。

それにしても、親父自身はどうだ、相変らず京城帝国大学出身という何の役にもたたない亡霊に取りすがって生きて行こうとしている。日帝時代は朝鮮総督府の官吏をし、解放後は左翼に関係し、その後はブローカーみたいなことをしながら小さな商事会社の一つも作ったのだが、それが手形の不渡りを食ったりして倒れてしまった。おかげで、おれは大学を一年だけで止めねばならなくなったわけだ。それはともかく、落ち目になってなおしがみつくその京城〝帝大〟出身というのは、そんなに誇り高きことなのか……。あれは日帝時代の植民地大学ということではないか。うむ、こんな見方をするのも兄貴の影響だな。

何とか体面を汚さずに生活をやっていけるのは、市場に小さな店を一つ持って雑貨の商いを一生懸命している母のおかげだよ。兄貴のことにしたって、学校に余り行っていない母のほうが却ってもの分かりがいいというものだ。……ねえ、完道や、おまえがどうしてもソウルのその子が好きだったら、オモニは反対しないよ。おまえの好きなようにするしかないんだからね。アボジには口答えなどして逆らわないようにしておくれ。それで、いいかい、二人だけでこっそり式を挙げたりしてはいけないよ。もしものこと、アボジが行けなくても、わたしが行くからね。……親父のいないところで、兄貴にいっていた母のことばだ。おれも、あの李道会議員の娘と結婚するのは反対だなあ。彼女の弟の野郎が気に食わん。結婚すれば、あいつとおれは姻戚関係になる

というものだ。なにがサドンなものか。李尚権（サングオン）のやつ、高校のときはにきびだらけのごつごつした顔だったのに、大学生になってから女みたいにきれいな肌に変りやがった。まるで妓生（キセン）オッパ（兄さん）、にやけたこうもり野郎だ。それに、この夏休みに会ったときの態度はどうだ。軍隊で服務しちゃんと国民の義務を果したおれを、反対にないがしろにした目付きで見やがった。口にこそ出さなかったが、軍隊に行かないのが誇りだといわんばかりの態度なんだ。しかし、あいつの父親は醤油会社の社長で金持だ。国会議員を狙っているという話だが……。

あ、そうだ、もう一人の、二番目の兄貴がいる。長いあいだ会わないもんだから、うっかり自分の兄を忘れるところだったよ。現役の陸軍中尉どのだ。母と彼がいちばんましで、しっかりもんかも知れんなあ。

親父にしたって事業に失敗したんだから、運が悪かったんだ。それでも、おれのことを気にして、山道よ、わしはなあ、三人の息子のなかで、おまえだけ大学を卒業させられなかったのをすまないと思っとるんだ、と口癖のようにいう。気にすることはないさ、親父みたいに〝京城帝国大学〟でなくて申しわけないよ。うむ、それにしても、カネがほしい、小遣いもほしいが、カネの二、三十万も作れたら大学へ行ってやるよ……。

張山道はチャヂャン麺を食べ終ってから、何気なしにふたたび雑誌のページをぺらぺらと繰ってみた。

おやっ、これはなんだ……？　張山道はぎくりとして、ページに指を置いたまま視線をそこへ

突き立てた。二、三の写真のうちの一つが眼に飛び込んできたのだ。名刺の半分ぐらいの大きさだったが、ぎくりとするのも当然、瞬間それが自分の写真だと思ったのだった。まさか、おれの写真がこんなところへ出るはずもないのに……、しかし、世の中にはどんなことが起こるかも分からないと思いながら、彼は急いで記事の見出しと、内容を読みはじめた。〝青武台(チョンムデ)の韓世奉(ハンセボン)君……云々……。〟

なんだ、おれではなかった……。へへえ、まかり間違っても、おれが大統領の養子ということはないよ……、安堵と淡い失望感が雑誌の記事と写真の上を走る。青武台とは大統領官邸のことだ。大統領の写真と並んだこの年齢も二十二歳で自分とよく似ている青年は、韓世奉、大統領の養子になった韓世奉だったのだ。父が国会議長であり、大統領の養子になったのは知っていたが、まだ写真なるものは見たことがなかった。また、国立大学、それこそ旧京城帝国大学の後身、ソウル大学特恵(無試験)入学を許可されたということで、在学生たちがストライキ抗議をして問題になったこともある青年だった。そういえば、ソウルの盛り場の派出所で警官をぶん殴っても罪にならずに、すぐ「訓放(クンバン)」されたのを新聞で読んだことがある。法律の上では何の力も与えられていない一青年が、大統領の養子になった途端、恐いものがなくなってしまったというわけだ。うむ、畜生め……、羨やましいもんだ。たしかに、軍隊で「気合」をしこたま食わされてきた張山道にとっては羨やましい存在だった。……それにしても、なんとおれに似てるんだろ、童顔で、それで案外上品な顔をしてやがる。ふふん、頭はあんまりよさそうじゃないよ……、張山道は自

分の顔を鏡に映して見ているようで、にやりと笑った。

どかどかっと三人連れの男が入ってきて、張山道のまえのテーブルに腰を下した。店先の気配に調理場の親子喧嘩がやんだ。張山道は反射的に雑誌を閉じて立ち上り、カネを払って外へ出た。

店のまえでいったん立ち止まって、鼻毛の長いやつを一本引き抜くと、大きなくしゃみが飛び出した。頭がすかっとする。白い開襟シャツ姿の張山道はグレイのズボンのポケットに片手を突っ込んで歩き出した。

途中、たばこを買って一本口にくわえ、バス道路の歩道を市場のほうへ向った。軍隊から帰っておぼえたたばこで、まだ親の面前で吸ったことがない。この国のしきたりでは一般に、年長者や親のまえでたばこを吸うのは非礼、つまり許されないからだが、その限りでは、張山道も儒教精神に培かわれた「東方礼儀の国」の住人であるのは間違いない。朝鮮ではごろつきでも、親のまえでたばこを吸うのを憚かるのである。

さてと、チャヂャン麺を食べ終った張山道は、この何日間寄っていない市場の母の店へ顔を出してみようと思った。朝、母が店へ出かけしなに、きょうは店へ行くよといっておいたのだ。

最近まで母の店で衣類や雑貨売りの手伝いをしていたのだが、どうも性に合わない。それに夏休み中は、帰省していた高校の同窓生たちに、そんな売子みたいな恰好を見られたくなかったとしても無理はないだろう。軍隊から帰ってきて、いくら仕事がないとはいえ市場の雑貨売りの店番では威張れない、というのが彼の気持だった。だいたい、おれはもう選挙権もある一人前の大

人だのに（それでも親はまるで子供扱いなのだ）、そんな女々しいことができるものかという自負がある。そんなところへ、エリート気取りの同窓生がハンカチとか、靴下とか、シャツの一枚でも買いにやって来たら……どうなるか。別にどうもなりはしないのだが、彼はそれを想像すると、ともかくいやになるのだった。

で、そういうこともあって手伝いを止めたが、夏休みが終り、同窓の大学生たちの姿がU市の町から消えてしまってからも、張山道は店へ行く気がしなくなった。そして、ずるずると日が延び、このごろはほとんど顔を出していないのである。それでも店番（ということは問屋参りを含めてのことだが）をしているあいだは、小遣い程度は懐ろに入った。しかし、張山道は思うのだ。何もおれは小遣いを目当てにして母の店に出てるんじゃないんだ……と。

晩夏とはいえ、まだ九月中旬の陽射しが強い。十日余りまえに東南部海岸一帯を襲った台風が通過してからは、空は高く澄んで陽射しがきつくなったようにさえ思える。歩くと汗ばんできた。街路樹の木蔭を通るときは瞬間ひんやりとする。U駅のほうから汽車の汽笛がけたたましく響いてくる。

町の電柱や家々のガラス戸、掲示板などに、二、三ヵ月後の大統領と副大統領選挙の宣伝ビラや演説会のポスターが貼ってあった。ほとんど与党関係のものだ。

狭い歩道に自転車がたくさん並んでいた。この町は自転車が多い。やたらと多いのだ。バスやタクシーもあるのだが、町の交通機関の代表はなんといっても自転車というところだろう。ほと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com